慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	序文 : 文化人類学の現代的課題
Sub Title	Contemporary cultural anthropology
Author	鈴木, 正崇(Suzuki, Masataka)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2002
Jtitle	哲學 No.107 (2002. 1) ,p.i- iii
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集文化人類学の現代的課題
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000107-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

序文：文化人類学の現代的課題

鈴木正崇

1970年代に従来の社会科学や人文科学とは異なる発想と視野を持った学問として登場してきた文化人類学は，それまでの民族学という呼称にとって代わり，大学の研究や教育に組み込まれるようになってきた．今から考えれば，60年代に始まった高度経済成長が大学紛争やオイル・ショックを経て，再び急上昇へ転じる時代であり，当時，文化人類学に期待されていたのは，経済と対極にあるような異文化の情報によって人々のエキゾティシズムへの渇仰を満たし，知の視野を拡大することであった．比較文化という雲をつかむような視点，未開社会を研究する学問らしいという貴重性，長期にわたり現地で暮らし全てがわかったかのような超人たちへの期待，思いがけない過去との連続性の発見など，人々は人類学者たちを好奇と期待のまなざしでとらえた．一方で，日本国内では共同体の再評価が行われ，喪失しつつあると語られる日本の民衆文化への関心が高まって，柳田国男が繰り返し取上げられ，民俗学が注目されるようになった．そこに人々が発見したのは，高度経済成長で急速に失われた「もう一つの日本」であり，郷愁に満ちた想いでそれを見つめ，日本の中の異文化として定位することであった．人々は文化人類学や民俗学に対して，浮世離れして面白そうな学問だが胡散臭いという複雑な気持を抱いていたようである．その一方で，構造主義というフランスを中心に広まった人類学における力強い方法論は，一時期多くの分野を席巻し，人類は未開と文明を問わず普遍的な思考を持つという衝撃的なメッセージは多くの人々の関心を引き寄せた．

当時，この分野に入ってくる人々は専門の研究者を目指すというより

も，世界放浪の果てにとか，山歩きや探検の延長として，いつのまにかこの学問に入りこんでいたという人が多いようである．かくいう私も，1971年にはユーラシア放浪の旅の途上であった．不幸にして2001年9月11日に発生したニューヨークの同時多発テロ事件に引き続いて，巨大な戦場になってしまったアフガニスタンをちょうど30年前の秋に歩いていたのである．ヘラートからカンダハルを経てカーブル，そしてバーミヤンへという当時のヒッピーたちのお決まりの道筋をたどった．どこまでも青いアフガニスタンの空，赤茶けた沙漠と砂嵐に覆われる遺跡，折りしも北から南へと下ってくる遊牧民，つんざくようなアザーンの祈り，そしてバザールの魅力的な雑踏，絶望的なまでに理解を拒絶するパシュトゥーン人，まさしくこれが文化人類学へ向かう原点であった．目くるめくような多様性に満ちた民衆を理解するような学問は何か，それを求めて30年後に人類学者になってしまった，というのが偽らざる真実である．

80年代に入ると，構造主義は下火になったものの，多様な文化についての強い関心が広まりを見せ，文化相対主義という文化人類学の他者認識の方法が定着する一方で，全知全能のように異文化を語る人類学者の記述方法が批判される時代となった．そして，89年以後の共産圏の崩壊により冷戦構造が崩れ，パンドラの箱を空けたと形容されるような民族と宗教をめぐる泥沼のような紛争が溢れ出る時代がきた．これは民族学とも呼ばれる文化人類学の対応すべき実践的な主題となる．90年代には難民や移民，外国人労働者などの大規模な移動，援助と開発で加速度的に開く先進国と発展途上国の格差，急速な情報化の進展による人類の精神構造の大変革にともなう諸問題が先鋭化してきた．かつては想像も出来ないような急激な変化による異文化の混淆と葛藤が起こってきている．文化人類学が牧歌的でロマンに満ちた世界を面白く語る時代は終わり，異文化との共存と他者理解という月並みではあるが極めて難しく，人類に永遠に残されるであろう課題に向かって，密度の高い調査に基づく新たな理論や記述の方法

を編み出すことが要請されている.

今回の特集では，表象や観念，実践や組織が対象として取り上げられ，宗教・芸能・見世物・巡礼・伝説・個の概念などを素材として，一方では政治経済や医療などの現代の巨大な現象と人類学との関連が論じられている．普遍性と個別性，異文化記述の課題を問うという多様な主題と考察が展開されているとも言える．若手の人類学者たちの寄稿であるが，いずれも現代的な課題への挑戦があり，実践的な問題意識を秘めている．荒削りのものもあるが，新しい挑戦と受け止めて，この論集を契機に活発な議論が繰り広げられることを期待したい．最後に，これまでの慶應義塾大学での文化人類学の研究・教育の現状を検討して，今後のあり方を考える論説を掲載した.

今回のように多数の寄稿が寄せられるまでには，多くの方々のご協力があったが，特に宮家準先生（國學院大學教授，慶應義塾大学名誉教授）の長年の御指導が大きな役割を果たした．2001年度で定年後3年を経過し，慶應義塾での講義を持たれることはなくなるが，感謝の気持をこめてこの論集を献呈することにしたい.

2001年12月